

恋愛・スノビズム

——『失われた時を求めて』の原母体（二）

武藤 剛史

はじめに

前稿では、『失われた時を求めて』における無意志的記憶の意味や役割について、集中的に論じた。無意志的記憶は、『失われた時を求めて』に主たる「原材料」を提供しているばかりか、この巨大な作品を支える「全芸術論」を、さらには作品の構造自体をも、厳密に規定している。そうした意味において、無意志的記憶こそ『失われた時を求めて』の原母体であるということができるだろう。

ブルーストにとって、無意志的記憶によって蘇る現実こそ、真の現実である。しかし、ここで言う「真の現実」とは、万人共通の事実、すべてのひとびとの主観に妥当する現実、科学的意味での客観的真実といったものではまったくなく、私たちひとりひとりの生と存在の根源・根底である現実、私たちのひとりひとりの真の生、真の自己そのものである現実である。『失われた時を求めて』という小説の中心主題とは、こうした意味における真の現実の発見と認識、そして芸術創造によるその実現ということにはかならない。というのも、この「真の現実」とは、私たちひとりひとりが生きている真実の世界、私たちひとりひとりの真の自己であるにもかかわらず、私たちは普段の生活において、その真実の世界を生きてはおらず、私たち自身もまた、真の自己として生きているわけではない。私たちがみずからの真実の生を知り、私たち自身が真の自己として蘇るのは、無意志的記憶ないしは「謎めいた印象」という現象によってである。ただし、無意志的記憶や「謎めいた印象」は、外的偶然によって生じた主観的現象にほかならず、それによって、私たち自身の真実の生、真の自己が意識されたとしても、ほんの一瞬のことに

すぎない。そうした現実を真に実現するには、芸術創造によって表現するほかない。

「真の芸術の偉大さとは〔…〕真の現実をふたたび見出し、ふたたび捉えることによって、その現実を私たちに認識させることにある。私たちはその現実から遠く離れて生きている。私たちはその現実を習慣的な知識に置きかえてしまうのだが、そうした知識が厚みと不透明性を増すにつれて、私たちはますますその現実から遠ざかっていく。私たちは、この現実を知らないまま、死んでしまう可能性さえ大いにある。しかもこの現実こそ、まさしく私たちの生なのである。真の生、ついに発見され、明らかにされた生、つまりは私たちが真に生きたと言える唯一の生、それが文学なのだ」。(IV-474)

もちろん、「失われた時を求めて」という小説は、そうした真の現実、真の生、真の自己の表現からのみ成り立っているわけではない。ブルースト自身、つぎのようにも述べている。

「〔…〕私の書物のマチエールは、真に充実した印象、超時間的な印象だけで構成されるわけにはいかない、と私はすでに心に決めていた。私がそれらの印象をつなぎ合わせようとしている真理のなかには、時にかかわる真理、人間、社会、国家といったものがそのなかに浸りつつ、変化していく、そんな時にかかわる真理もまた、重要な場所を占めるだろう」。(IV-510)

事実、「失われた時を求めて」において、無意志的記憶や謎めいた印象、いわば特権的瞬間の主題、そしてそれらの現象によって蘇る真の現実を実現する方途としての芸術の主題が占める割合はごくわずかでしかなく、その大半は恋愛の主題、そして社交界・スノビズムの主題が占めている。それならば、特権的瞬間および芸術の主題と恋愛および社交界・スノビズムの主題はどのような関係でつながっているのか、あるいは両者は単に並列されているにすぎないのか。これまで書かれたおびただしい数のブルースト論によっても、このことはかならずしも明らかになっていないように思われる。

本論において明らかにしようと試みるのは、まさしく両者の関係である。あらかじめ見通しを述べておけば、たしかに分量的には、特権的瞬間および芸術の主題が占める割合はごくわずかでしかなく、大半は恋愛および社交界・スノビズムの主題が占めているとしても、あくまで要となるのは前者であり、究極的には後者は前者に包摂される、あるいは止揚されるのである。

本論におけるブルースト作品の引用略符はつぎの通りである。

I-IV *A la recherche du temps perdu* (Bibliothèque de la Pléiade) I-IV, Paris, Gallimard, 1987-1989

I ふたつの自己の関係

すでに述べたように、私たちのうちにはふたつの自己が併存する。ひとつは私たちが通常そうであるところの自己、いわば日常的自己・社会的自己であり、その本質は主体性、知性・意志、時間性にある。もうひとつは、無意志的記憶や謎めいた印象によってもたらされる真の印象、真の現実とともに、そうした印象・現実の意識そのものとして蘇る自己のことであり、ブルーストはこの自己こそ、私たちの真の自己であるとしている。この自己の本質は受容性、直観、永遠性にあると言えるだろう。

言うまでもなく、特権的瞬間および芸術の主題は後者に対応し、恋愛および社交界・スノビズムの主題は前者に対応する。それゆえ、特権的瞬間および芸術の主題と恋愛および社交界・スノビズムの主題との関係を知るうえで、このふたつの自己の関係をすることが重要な鍵になるはずである。あるいは逆に、特権的瞬間および芸術の主題と恋愛および社交界・スノビズムの主題の関係をすることが、このふたつの自己の関係を知らずにもつながるのであって、このふたつの関係は並行し、対応しているのである。

ともあれ、まずはふたつの自己について考えてみたい。ブルーストが特権的瞬間において蘇る自己を真の自己としているのは、この自己こそ私たちが本来そうであるところの自己、原初の自己だからであり、私たちが通常そうであるところの自己とは、その真の自己から派生した二次的自己にはかならない。

真の自己とはいかなる存在か。すでに何度も触れたように、真の自己は特権的瞬間において蘇る。特権的瞬間とは、主体としての私たちの自己が意味づけ、構成する以前の現実、私たちの意志や知性が介在することなく「おのずから形成される現実」、純粹な〈現われ〉としての現実が蘇る現象であり、しかもこの純粹な〈現われ〉としての現実こそ、世界の始原にして根源なのである。真の印象、純粹な〈現われ〉としての現実が、超時間的な現実だと言われるのはそれゆえである。とはいえ、何かが現われるのは、誰かに現われるのであって、この誰かが存在しなければ〈現われる〉ということ自体が成立しない。そしてこの誰かとは〈私〉以外の誰でもありえない。というのも、自分を感じ、自分を知ることができる存在、すなわち自覚存在だけが、何かを感じ、何かを知ることかできる。つまり〈自己性〉こそ、何かが現われることの必須条件

なのである。私たちの原初の自己、真の自己とは、そうした〈自己性〉にはかならない。しかしこの自己は、何かが、あるいは世界が、現われるに先立って、あらかじめ存在しているわけではない。この〈自己性〉≡〈私〉は、〈現われる〉ことそれ自体のうちに、〈現われる〉ことの必須条件として内在している。だからこそ、この〈自己性〉≡〈私〉は、真の印象、純粹な〈現われ〉としての現実が現われると同時に、その現実と一体となって蘇るのである。

「時間の秩序から抜け出した一瞬間が、その瞬間を感じるべく、われわれのうちに時間の秩序から抜け出した人間をふたたび生み出したのである。」(IV-451)

このようにブルーストの言う真の自己とは、真の印象、純粹な〈現われ〉としての現実を受容しつつ、その印象≡現実を成立させる存在である。言い換えれば、真の自己とは、世界Ⅱ時の始まりに立ち会う存在、あるいは世界Ⅱ時の始まりを媒介する存在、さらには世界Ⅱ時が始まる〈場〉そのものとしての存在である。

もちろん、この真の自己は、世界Ⅱ時を在らしめたり、それを構成したりする主体ではない。この自己は、世界Ⅱ時の〈現われ〉をもつばら受容する存在でしかない。つまり、真の印象、純粹な〈現われ〉としての現実が現われると同時に、それを感じるべく蘇る存在にはかならない。ところが、この受容者としての自己、純粹な受動性を本質とする自己が、やがて主体としての自己に変貌し、変質する。この変貌・変質の過程をたどることはきわめて難しい。ブルースト自身、それを明確に説明しているわけではない。ともあれ、この変貌・変質の過程は、大略、つぎのように説明されるだろう。

私たちの真の自己は、みずからの存在を受けると同時に、その自己という存在の属性としてのさまざまな能力、すなわち、見たり、聴いたり、感じたり、思ったり、考えたりする能力、さらにはみずからのものとして与えられた肉体を動かす能力、そうした能力をも合わせて受ける。そうした能力はみずから駆使することができるものとして与えられたものである以上、どんな自己であれ、また多少の能力差はあるとしても、やがてはそうした能力を意のままに駆使できるようになる。自分に付与されたさまざまな能力を意のままに駆使することができるようになるとは、自己自身がそうした能力の主体になることである。こうして、みずからに与えられたさまざまな能力の主体となった自己は、それらを自由に駆使することによって、自分自身を意のままに動かすことができる（じつさい、人間はみずからの生き方を自由に選択できるし、場合によっては、みずからの存在を抹殺することさえできる）。かくして自己は、自分自身を意のままに動かすことによって、あたかも自分が自分

みずからの主体となったように思い込む。そうした状態がさらに続くと、自分はもともと主体なのであって、自分という存在は自分以外の何ものにも依拠しないと考えるようになる。こうして私たちの自己は、主体以外の何ものでもない存在、絶対の主体であるとみずからを見なすにいたる。

私たちが通常そうであるところの自己とは、みずからをそうした主体であると思えずと同時に、じつさいにそうした主体としてふるまう自己である。みずからを自立自存の主体とするこの自己は、自分以外のすべてのものを自己の対象とし、そうして対象化したすべてのものを、自己自身の関心や欲望によって構成し、また意味づける。しかもこの自己の本質は、その自己中心性、すなわち自分自身の存在を維持し、さらには拡充・強化したいという欲望にある。それゆえ、私たちの日常生活、社会生活は、もっぱらこの欲望を根本原理として構成され、営まれている。それぞれの人間が、みずからの生存を維持し、安全で快適な生活条件を確保しつつ、他者との競争に打ち勝っていくために、自分以外のあらゆるもの、あらゆるひとと絶えず交渉し、ときには協力し、ときには闘うことも辞さない。私たちは、通常、こうした自己として生きていることに何ひとつ疑問を感じないし、多くの場合、こうした自己であることに自足している。

しかし、みずからを自立自存の存在と見なしているこの自己、つまりはみずからを絶対の主体と見なしているこの自己は、じつは自立自存する存在でもなければ、絶対の主体でもない。先に見たように、私たちの自己自身も、私たちの自己が駆使するさまざまな能力も、もともと与えられたものであって、私たちの自己に属するものではないからである。言い換えれば、私たちの自己、そして私たちの駆使する諸能力、それらの真の主体は、私たちの自己ではないということである。たしかに、私たちの自己は主体でありうるが、そうありうるのは、自己自身の力によつてではない。私たちが主体でありうることも含めて、私たちを自己たらしめているのは、私たちの主体性を超えたある絶対の主体であると考えざるほかない。もちろん、この絶対の主体は私たちの自己が認識しうる対象として存在しているわけではない。しかし、私たちの自己および私たちが生きる世界が〈与えられている〉、しかもつねに与えられ続けているという事実それ自体によつて、この絶対の主体は想定しうるだろう。何度も見たように、私たちの真の自己とは、真の印象、純粹な〈現われ〉としての現実が現われると同時に、その現実を感じるべく、その現実とともに蘇るのであり、しかもこの現象には、私たちの意志や知性、つまりは私たちの主体性は、まったく関与していないのである。ということとは、真の印象、純粹な〈現われ〉としての現実を現象させ、それと同時に私たちの真の自己を蘇らせるある絶対的な力がたしかに働いているということの意味する。この絶対的な力こそ、私たちの真の主体であり、私たちの生と存在の根拠・根底なのである。

ともあれ、私たちが通常そうであるところの自己は、私たちを自己たらしめている絶対の主体、私たちの生と存在の根拠・根底からすでに離脱してしまっていると言わねばならない。つまりこの自己は、みずからの生と存在の根拠・根底を奪われた欠如態にほかならず、それゆえ私た

ちは、自分ではまったく自覚しないところで、この欠落・欠乏をみずからのうちに抱え込んでしまっているのだ。そしてこの欠落・欠乏から生じる欲望こそ、私たちを突き動かす根源的渴望となる。この根源的渴望は、もともと、みずからの絶対の主体、みずからの生の根拠・根底を求める衝動にほかならないのだが、そのことを知りえない私たちは、この渴望を外部世界の何らかの対象に投影してしまう。旅行の夢も、恋愛の夢も、社交界の夢も、すべてそんなふうにして生まれる。もちろん、この渴望を真に満たしてくれる対象が外部世界に存在するはずはなく、それはあくまで錯覚であり、幻想にすぎない。にもかかわらず、この錯覚ないしは幻想は、私たちがみずからの経験によって、この渴望を満たしてくれる対象はこの世に絶対にありえないということを徹底的に思い知るまでは、つまり完全なる幻滅、失望にいたるまでは、けっして消えないだろう。少なくとも、それが「失われた時を求めて」の主人公「私」の運命であった。

「私には、こんな思いがわき起こった。幻影ばかりを追うのが私の運命だった、と。またその現実性の大部分が私の想像力のなかに存在するような人間ばかりを追い求めるのが私の運命だった、と。じっさい、おかしい人間がいるもので——しかも、それが若い頃からの私の運命だったが——その人間にとっては、他の人間には固定した、確かな価値を持っているもの、たとえば財産とか、成功とか、高い地位といったものが、すべて物の数に入らないのだ。こんな人間に必要なのは幻影である。彼らはそのために、他のすべてを犠牲にし、あらゆる能力を傾け、そうした幻影に出会うためにあらゆる手段を尽くす。けれども、幻影はすぐに消え去る。すると何か別の幻影を追う。しかし結局また、最初のものに立ち戻るだけである」。(III-401)

すでに見たように、「失われた時を求めて」という小説の大半の頁は、恋愛の主題、社交界・スノビズムの主題、社交界・スノビズムの主題が占めている。恋愛の主題、社交界・スノビズムの主題とは、一言で言うなら、自分を苛んでやまない根源的な渴望の対象を外部の世界に追い求め続ける悲喜劇である。もちろん、それは幻想・錯覚にすぎず、いずれは幻滅・失望に終わらざるをえない。しかし、そうした試練を経ないかぎり、自分を駆り立てる渴望の真の対象が外部世界には（つまりこの世には）存在しえないことを、私たちは納得できないのである。

II 就寝のドラマ

以上のように、私たちが通常そうであるところの自己は、みずからの真の根拠・根底を否定し、その真の根拠・根底から遊離してしまった自

己であり、それゆえにみずからのうちに深い欠落・欠如をかかえている存在である。この欠落・欠如から深い渴望が生まれるが、私たちはこの渴望の真の原因、真の対象を知ることができない。というのも、この渴望は、まさに私たち自身がこの渴望の真の原因、真の対象そのものを否定したことによって生まれたものだからである。そこで、この不可解な渴望、しかもみずからの力によってはとうてい満たすことのできないこの渴望を、私たちは無意識の領域に押し込めて、あたかもそんな渴望はなかったかのようにして生きていくようになる。この渴望を、あるいはその背後にある欠落・欠如を、つねに意識しながら生きていくことなど、私たちにとって、とうてい不可能だからである。大人になるとは、分別を持つとは、この渴望を、またその原因である欠如・欠落を、忘れ去るということにほかならない。さもなければ、私たちは一人前の大人として、分別のある主体として、生きることができない。『失われた時を求めて』の冒頭に置かれた『就寝のドラマ』は、この渴望に、そしてその根底にある欠落・欠如の苦悩に、少年の「私」がついに打ち克つことができず、そのために、この渴望と苦悩を生涯にわたって引きずって生きることになる運命を予告するものである。

「コンブレーでは、毎日、夕暮れになると、母や祖母から離れてベッドに入っただまま眠らずにいらなくてはならない時間にはまだずいぶん間があるのに、その寝室のことがどうにも気にかかって、ほかのことは何ひとつ考えられなくなってしまうのだった。」(16)

たしかに、『就寝のドラマ』において、「私」の渴望の直接の対象は母である。しかし、この渴望は現実の母に向けられたもの、現実の母が原因となって生まれたものではない。この渴望は、あくまで「私」が母から引き離されることによって生まれるのであり、そうして引き離され、近づけなくなった母、不在となった母に向けられるのである。つまり、引き離され、近づけない母、不在の母を、渴望の対象として思い描くのは「私」の想像力にほかならず、「私」はそうして思い描いた母のうえにみずからの欲望を投影しているのだ。それゆえ、母に近づけない、母から引き離されているという意識が「私」にないかぎり、たとえば昼間のように、じつさいに母がその場にいないことも、いつでも母に近づくことができているかぎり、「私」は渴望や苦悩を覚えることはない。このように、『就寝のドラマ』において「私」を苛む渴望、激しい苦悩は、もともと「私」が潜在的に抱いている感情にほかならず、それが母に近づけない、母から引き離されているという状況がきっかけになって、意識に蘇ったのである。しかもそれは、「私」という特別な人間の特異な感情といったものではなく、私たちの誰しもが抱いている普遍的な感情なのであって、その感情は私たちのうちから完全に消え去ることはけっしてありえない。

「私がさっきまで感じていた苦惱、そんなものをスワンは「…」ずいぶんばかにしただろう、とそのときの私は考えていた。ところが逆に、後年知ったことだが、それに似た苦惱がスワンの生活の長年の苦しみの種だったのであり、おそらくは彼ほどよく私の気持を理解することができたとはいなかったのだ。彼の場合は、自分がいない、自分が会いに行けない、そんな快楽の場所に、愛するひとがいるのを感じるという苦惱であつて、それを切実に感じさせるようになったのは恋なのであつた。この苦惱は、恋に結び付けられるように、いわばあらかじめ定められているのであり、やがては恋がその苦惱を独占し、それを特殊化することになるのだ。しかし、私の場合のように、恋がまだ実生活のなかに現われる以前に、その苦惱が心のなかに入ってきたときは、その苦惱は恋が現われるのを待ちながら、漠然と、勝手気ままに、定まった相手をもたず、ある日はある感情に、翌日は他の感情に、あるときは子としての感情に、またあるときは友だちへの友情に手を貸して、そのあいだをさまようのである」。(I-30)

このような激しい渴望や苦惱は、第三者から見れば、まったくこっけいでしかない。私たちが通常そうであるところの自己、みずからの主体性を信じて疑わず、それに安住している自己からすれば、自分の命や生活が脅かされているわけでもなく、夜のあいだだけ母親から引き離されるにすぎないのに、これほど激しい渴望や苦惱を覚えるというのは、まったく不可解である。「私」自身、そのことを十分理解しているし、この渴望や苦惱そのものも、明日の朝になれば、すっかり消えてしまうことを知っている。しかしそんな分別を働かせても何の助けにもならず、今の「私」にはこの苦惱と渴望をどうすることもできないのだ。

「じきに母が寝にあがつてくる。そうしたら、私は部屋から出て母のまえに立つ。母は、私がいまだ一度廊下でおやすみを言うためにずっと起きていたことを察するだろう。そうなったら、私はもう家には置いてもらえない。明日にも学校の寄宿舎に入れられるだろう。それは確実だった。それでもいい！ たとえ五分後に窓から身を投げなくてはならないとしても、まだそのほうが私にはよかつた。いま私が欲しいのは、ママだった、ママにおやすみを言うことだった「…」」。(I-33)

ところで、「私」を深く愛する母や祖母は、「私」がどれほど苦しんでいるか、よく知っていたが、「私」の将来を考えれば、「私」がそれに耐えること、それに打ち克つことが必要であることもまた、よく分かっていた。

「父が私を寢室に追いやるとき、ずいぶんきびしいと私は思ったが、その父の厳格さも母や祖母の厳格さにくらべると、おそらくはそう呼ぶに値しないものでさえあったかもしれない。なぜなら父の性質は、いくつかの点で、母や祖母の性質以上に、私の性質からかけ離れていたの、毎晩私がどんなに不幸な思いをしていたか、母や祖母がよく知っていたことを、たぶんこのときまで察したことはなかっただろうから。だが母や祖母は私を深く愛していたので、私を苦しめないようにしてやろうとはせず、逆に、私の神経過敏をなくし、私の意志を強くするために、その苦しみ打ち克つことを教えようとしていたのだ。」(137)

それゆえに、「私」のあまりに大きな悲しみに決心が揺らいで、母が「私」に譲歩してしまったこの晩は、母にとっても、また「私」にとっても、「悲しい日づけ」として残ったのである。

「こうしてはじめて、私の悲しみは、もはや罰すべき過ちではなく、一種の無意志的な病氣と考えられたのであり、みんなはそんな私の病気を、私には責任がない神経症状として、いまこの場ではっきり認めたのである。」(137)

しかし、こうした渴望と苦悩に打ち克つことは、一人前の社会人として生きていくうえでは必要なことではあっても、逆にそれは、私たちが真の人間の条件をすっかり忘れ去ることでもある。というのも、この渴望と苦悩は、私たちの自己がみずからの根拠・根底を否定し、そこから離脱してしまったことから生まれたものであって、それゆえ、「私」のように、この渴望と苦悩に打ち克つことができず、それに苛まれ続けることこそが、私たちがみずからの生と存在の根拠・根底を想起し、そこに立ち戻るための唯一の手がかりとなるからである。

私たちが通常そうであるところの自己、主体としての自己は、多くの場合、みずからが抱え込んでいるこうした渴望と苦悩を無意識の領域に閉じ込めて忘れ去り、あたかもそんな渴望や苦悩はもともとなかったかのようにして生きていくだろう。しかし「私」のように、この渴望と苦悩に打ち克つことができない場合には、その渴望を満たし、苦悩を癒してくれる対象を自分の外部に思い描き、そうした対象を追い求め続けることを運命づけられる。もちろん、そうした対象は私たちのうちに潜んでいる渴望と苦悩が私たちの想像力に思い描かせたものにすぎず、いくらそうした対象を追求したところで、さらにはその対象に到達し、それを所有したところで、というよりも、まさにその対象に到達し、それを所有することによって、つまりその対象が現実のものとなることによって、失望と幻滅に終わるだろう。しかし、そうした失望と幻滅を繰り返すことによって、そのような対象はこの世には存在しえないということを徹底して認識することが、人間の真実を知るうえでの必要条件なので

ある。

Ⅲ 恋 愛

私たちのうちにひそむ根源的な渴望が投影されるのは、私たちにとって未知なもの、近づけないもの、引き離されたもの、自分から奪われたもの（あるいは奪われたと私たちが思い込んだもの）、一言で言えば、不在の対象、非現実の対象にたいしてだけである。というのも、この渴望は外部の何らかの対象が原因で生まれたものではなく、あらかじめ私たちのうちに内在しているのであって、この渴望を満たしてくれる対象はもともと外部の世界には存在しないからである。この根源的な渴望は、私たちのうちにつねに潜んでいるのであって、そのきつかけさえ与えられれば、ただちに蘇ってくる。しかも、この渴望は変幻自在であり、およそありとあらゆるものにたいする欲望に変身する。

「ある本を読んでいるとき、その本に描かれている地方を訪ねることを両親が許してくれたなら、私は真実の探求に向かってこのうえなく貴重な一步をふみだすように思ったであろう。（…）そんなわけで、私が当時一番訪ねたかった場所を、愛する女性のまわりにいつも思い描いたり、そこに私を連れて行って、未知の世界の扉を開けてくれるのも、その女性であってほしいと思ったりしたのは、単なる連想の偶然のせいではなかった。そうではなく、私の旅行の夢、恋愛の夢は、何ものにも屈せずに一様にほとばしりでる私の全生命力の一瞬一瞬の形〔…〕にほかならなかったのだ。（1-85,6）

しかし、旅行の夢の場合、その対象がバルベックであれ、フィレンツェであれ、ヴェニスであれ、現地に行ってしまうえば、つまりはそれらの土地が現実のものになってしまえば、その夢や憧れはおのずから消え去るのにたいして、恋愛の夢がいつまでも続くのは、相手が人間だからであり、相手と親しくなり、さらには肉体関係に入っても、相手の未知性には限りがないからである。たしかに、相手の肉体は目に見えるし、その肉体を所有することもできるが、その内面は目に見えず、しかもかぎりなく広大であり、その広がり的一切を知り尽くすことはぜったいに不可能である。ともあれ、恋愛もまた、まずは相手の未知性によって生まれ、相手の未知の部分をもっていたという欲望として現われる。

「あるひとが未知の生活を送っており、私たちはそのひとに愛されることによって始めて、その未知の生活に入ることができると信じる

こと、それこそ、愛が生まれるのに必要なあらゆる条件のなかでも、もっとも重要な条件であつて、この条件さえあれば、それ以外の条件はいつでもよくなつてしまふのである」。(I-100)

たとえば、バルベックに行き、「花咲く乙女たち」に心惹かれるようになったのも、彼女たちの未知性、捉えがたい不確かさゆゑであつた。

「あたかも古代ギリシアの処女たちから成り立っているように思われるこの小さな一団が私にもたらす快樂も、この一団が、どこか路上を過ぎ去つていく女たちの遁走のような要素を持つていることから生まれていたのであつた。〔…〕私たちを未知の国に出帆させるこれらの見知らぬ女たちの逃げ去る幻影は、私たちを絶えず追跡の状態に置くのであつて、そうなると思像力はもはやとどまることを知らない」。(I-796)

このように、恋愛感情は相手の未知性によつて生まれ、その未知の部分に欲望を注ぐ。というのも、相手を自分の欲望にふさわしいものとして思い描けるのは想像力だけであり、しかも想像力は不在の対象、未知の対象にしか働かないからである。これらの「花咲く乙女たち」のなかでも、「私」がとくにアルベルチヌに心惹かれるようになるのも、この一団の未知性、捉えがたさが彼女に集約されているように思われたからである。

しかし恋愛感情は、単に相手の未知性に向けられた夢や憧れにとどまることはできず、やがてそれは、相手にたいする嫉妬、つまりは相手が誰かに奪われているという悲痛な感情、苦悩に変貌せざるをえない。じつさい、スワンのオデットへの恋も、「私」のアルベルチヌへの恋も、最初はほとんど気まぐれに近い快樂への願望であつたものが、やがて、相手にたいする疑い、相手が自分以外の人間との快樂を欲しているのではないか、さらにはすでにそれを味わつてゐるのではないか、という疑いによつて、決定的なものになる。

スワンのオデットへの愛が決定的となつたのは、当然彼女に会えるものと思つて行つたヴェルデュラン夫人のサロンにオデットがいなかつたという落胆がきっかけだつた。

「彼女がもうサロンにいないことが分かると、スワンは胸に苦しみがわきあがるのを感じた。楽しみが奪い去られたことにおののくとも、はじめてその楽しさの大きさを知つた」。(I-223)

このように、彼女と味わえるはずであつた快樂が奪われたと感じただけで、その快樂がスワンにとって無限の価値をもつようになる。

「戀愛を作り出すさまざまな方法、この聖なる病を広めるあらゆる要因のなかで、ときとして私たちのうえを通りすぎていくあの激しい動搖の息吹こそ、まさしくもつとも効果的なもののひとつである。その息吹が過ぎていくときに、私たちがともに楽しみを分かっていたひとこそ、運命の賽子は投げられ、私たちの愛するひととなるだろう。相手がそれまで、他のひと以上に私たちの氣に入っている必要もない。いや、他のひとと同じくらいに氣に入っていることすら必要ではない。必要なことは、その人物にたいする私たちの好みが、排他的になることなのだ。そしてこの条件が満たされるのは——相手が私たちの身近にいないときに——相手の魅力が与えていた快樂の追求が、突然、私たちのなかで不安な欲求に取って代わられる瞬間であり、それは同じ人間を対象とするものでありながら、この世を支配する法則ゆえに、とうてい満たすことも不可能であれば、癒すことも困難となつた不条理な欲求、すなわち相手を所有したいという途方もない苦惱に満ちた欲求なのである」。(I-227)

そうなるともはや、相手は単なる快樂の提供者ではなくなり、むしろ苦惱の原因なのであつて、その苦惱を鎮靜するためにこそ、どうしても占有しなければならぬ存在となつてしまっているのだ。

「それに、彼自身、氣づいてはいなかったが、彼女が自分を待っているという確信、彼女がほかの男といつしよによそに行っていないという確信、自分は彼女に会つてからでなくては家に帰らないのだという確信が、いまは忘れているがいつでも現われようと待ち構えている苦惱、かつてオデットがヴェルデュラン家にはもういなかった夜、彼が感じたあの苦惱を抑えているであつて、この苦惱の鎮靜はじつに快く、幸福と呼んでもいいほどだった。おそらく、彼にとつてオデットが重要になつたのは、この苦惱のせいだったのだ」。(I-232)

「私」のアルベルチヌへの愛の場合もまったく同様である。アルベルチヌへの「私」の感情は一進一退を繰り返し、彼女との結婚は「まるでばかげた事柄のように思われ」、「別れるのに」決定的な絶好の機会を待つばかりだった、そんな矢先に彼女の口からなにげなく漏れた一言が、アルベルチヌへの狂おしいばかりの独占的な愛を「私」のうちにかきたてたのである。

「だが、(その女友達、それはヴァントウイユ嬢なの)」という言葉は(開け、胡麻)だったのであり、私自身で見出そうとしてもどうてい不可能だったにちがいないその呪文が、アルベルチーヌを私の裂けた心臓の奥深くに入り込ませたのだった。そして扉は、彼女を入れてふたび閉ざされてしまった。たとえ私が百年かかって調べても、その扉を開ける方法を知ることとはできないだろう」。(III-512)

「私」に突然の苦悩を引き起こしたのは、アルベルチーヌの同性愛の疑いであつた。もしアルベルチーヌが同性愛であるとすれば、彼女はもと「私」から奪われているのであり、男である「私」にはそんな彼女を取り返すすべはまったくない。そのうえ、女同士の愛は、「私」にはあらかじめ閉ざされた未知の世界であり、およそ想像もつかないのだ。

「サンリールにせよ、ほかの若者にせよ、そんな男たちに感じる嫉妬は何ものでもなかった。そんな場合であれば、せいぜいライヴァルをおそれるだけのことで、そのライヴァルに勝とうとすればよかった。ところが今度は、ライヴァルが私と似たような人間ではなく、相手の武器は違っていて、私は同じ土俵で闘うことができず、アルベルチーヌに同じ快樂を与えることもできなければ、彼女の快樂を正確に知ることもできないのであつた」。(III-504)

苦しみに耐えかねた「私」は、アルベルチーヌを監禁状態に置き、彼女を「囚われの女」にする。こうして彼女を同性愛の誘惑から守ることができると信じた「私」は、四六時中、彼女といっしょにすることに屈服し、「もう私はアルベルチーヌを愛していない」と思い込む。しかしそれも一時にすぎず、ふたたびさまざまな疑いが萌してくる。たとえば、いまアルベルチーヌが同性愛の相手と接觸することは不可能だとしても、現在のアルベルチーヌの背後には、無限の過去と未来が広がっているものであり、そのどこかで「私」にはまったく知りえない快樂を彼女が味わった可能性はあつたし、これからもあるだろう。

「私たちは、恋は自分のまえに横たわっている人間を対象としてると想像している。とんでもない！ 恋は、その人間が過去に占めた、そして未来に占めるであろう、空間・時間のあらゆる場所に拡大している。その人間が接觸した場所や空間、そのすべてを所有しないかぎり、私たちはその人間を所有したことはないのだ。」(III-607.8)

もはや「私」にとって、恋の相手は、目のまえにいるアルベルチヌではなく、その背後に広がる無限の時間と空間なのである。

「なぜなら、私にとって、彼女はもはやどうにも扱いようのない段階に達していたのであって、その段階に達すると、その人間は、空間と時間のなかにばらまかれ、私たちにとって、もはやひとりの女ではなく、解明できない一連の事件、解決できない一連の問題になってしまう。それはまるで、船を呑み込んだのを罰するために、クセルクスがこっけいにも打ちたたいた、あの海のようなものだ」。(III-612)

それゆえ、「私」のアルベルチヌへの恋は、つまり嫉妬の苦しみは、彼女が「私」のもとから逃げ去っても、さらには彼女が落馬事故で死んだあとになってからも、消え去ることはない。この恋を終わらせ、嫉妬の苦しみから逃れるには、「私」の内部に存在するアルベルチヌを死なせることが必要なのである。

「アルベルチヌの死が私の苦悩をなくすには、落馬による木との衝突がトゥーレーヌで彼女を死なせるだけではなく、私の心のなかでも彼女を死なせる必要があった。ところが、私の心のなかで、彼女はいまほどなまなましく生きていたことはなかった」。(IV-60)

しかし時が経つにつれて、忘却が作用し始め、私自身の内的状態にはかならない恋は、その忘却の作用を受けて、しだいに衰え、やがては消え去っていく。

以上のように、恋愛とはあくまで主観的な内的状態にほかならない。たしかに、恋愛は外部の世界にその原因ないし対応物が存在する、つまり愛の対象である人間がいる、と信じることによって生まれる。しかし、私たちが愛しうるのはあくまで相手の未知なる部分でしかない。

「アルベルチヌ自身についていえば、彼女はほとんど名前の形でしか、私のなかに存在していなかった。〔…〕自分の思考のまえにして、私はアルベルチヌの映像をながめることさえなかった。そのアルベルチヌこそ、私のなかにあのような魂の転倒をもたらした原因であつたのに、彼女の肉体は少しも見えなかった。〔…〕女についての私たちの気かりのなかで、女自身はきわめて小さな場所しか占めていないということに、おそらくは、ひとつの象徴、ひとつの真実がひそんでいる。つまり、その気かりのなかで、女自身は取るに足らな

いものだということであり、気がかりのほとんど全体を占めているのは、女に關してあれやこれやの偶然がかつて私たちに味あわせた感動と苦悩の一連のプロセスであり、それを習慣が女と結びつけてしまったのである」。(IV-16)

「恋愛の果てしなさ、あるいはその利己的性格ゆえに、私たちが愛する人間は、その知的、道德的風貌が客観的にもつとも捉えがたいひとたちであつて、私たちは自分の欲望と不安に合わせて、絶えず彼らを修正し、自分から引き離さずにおく。彼らは私たちの愛情を外在化させる茫漠とした場所にすぎないのだ」。(IV-77)

このように、恋愛とはあくまで内発的感情であり、その感情は他者との接触によつて目覚めるとしても、もともと自分のうちに潜んでいたものである。そもそも、この感情が相手の未知性によつてしか目覚めることもなく、相手の未知なる部分にしか投影されないということ自体、この感情が外部の世界においてはけつして満たされないものであることを示している。恋愛の感情も、「就寝のドラマ」において「私」が母にたいして抱いた感情と同じく、私たちの誰もが潜在的に抱いている根源的な渴望から生まれる。その根源的な渴望とは、すでに述べたように、私たちの自己がみずからの根拠・根拠を否定し、そこから離脱してしまったことによつて生まれた欲望である。

以上のことから、ふたつのことが言えるだろう。まず、(1)この根源的な渴望は、外部のいかなる存在にも依拠しない、つまりはいかなる外的原因も存在しない、あくまで内的な感情、私たちの内部において発生する感情である。つぎに、(2)この根源的な渴望とは、もともと私たちの自己がみずからの根拠・根拠を否定し、そこから離脱したことから生まれたものなのだが、自己自身にはそうした自覚はまったくなく、それゆえこの渴望は、外部世界に存在するこのうえもなく大切なもの、自分の命よりも大切とさえ思われるものから自分が引き離されている、あるいはそうした大切なものを奪われている、そうした意識として現われる。だからこそ、「就寝のドラマ」においてもそうだし、恋愛においてもそうだが、この根源的な渴望は、あくまで未知の対象、しかも自分が近づけない対象、さらには自分から奪われていると思う対象に向けられることになるのだ。もちろん、そうした対象は外部の世界、つまりはこの世にはけつして存在しないのだが、私たちはこの根源的な渴望を満たしてくれる対象がこの世にあつてほしいという思いをどうしても断ち切ることができず、私たちの想像力はあらゆるきつかけを捉えて、そうした対象を思い描く。まずは、絵や本に描かれた風景、旅行ガイドで読んだ都市の記述、うわさ話に聞いた少女や貴婦人、そうしたものにたいするはるかなあこがれとして現われるだろう。たとえば、「私」の想像力はまだ見ぬ都市の名にそうした欲望を吹き込む。

「それらの夢を再生させるには、私はただその地名を発音するだけでよかった。バルベック、ヴェニス、フィレンツェ、と。その名で示された土地が私に吹き込んだ欲望が、ついにその名の内部に入つて、そこに蓄積されてしまったからである。〔…〕その結果、それらの名は、ノルマンディまたはトスカナの町を、じつさいにそうであるよりもはるかに美しく、しかもはるかに異なつたものにし、私の想像力の恣意的な喜びをふくらませることによつて、未来の旅の失望を大きくした。それらの土地の名は、私がこの地上のある場所から作り上げる観念を高揚させながら、その場所をいつそう特殊な、したがつていつそう現実的なものにするのであつた。私はそのとき、町や風景や史跡を、ひとつの同じ材料から切り抜いて集めた、それぞれに見どころがある場面のようには描くのではなく、そのひとつひとつが未知なもの、本質的に他とは異なつたもの、私の魂が渴望しているもの、私の魂がぜひと知るべきもののように思い描くのだつた。〔1386〕」

しかし、この根源的な渴望がもつとも強い力を發揮して、私たちを支配するのは、嫉妬の感情としてである。つまり、私たちにとって大切な存在に近づくことが禁じられている、さらにはその大切な存在を奪われている、少なくともそう思われているときに、私たちがその対象にたいして抱く感情としてである。「就寝のドラマ」において、近づくことのできない母、近づくことを禁じられている母にたいして少年の「私」が抱いた感情がそうであつたし、スワンがオデットにたいして、さらには青年の「私」がアルベルチーナにたいして、それぞれに抱いた独占的・排他的な恋の感情もそうであり、それはまさしく狂おしいばかりの嫉妬の感情であつた。この嫉妬の感情は、自分の意志や理性によつてはどうにも制御できない感情、そのためには自分の地位、財産、名譽、それらすべてを犠牲にしてもよい、自分の命を捨ててもよいとさえ、思いつめるほどの感情なのである。世間の常識や分別からすれば、つまり私たちが通常そうであるところの自己、主体としての自己からすれば、それはまったく非常識な、狂気としか言えないような感情であるが、この感情にひとたび憑りつかれた人間には、そんな常識や分別はまったく通用しない。じつさい、そうした嫉妬の状態において、近づくことができない対象、奪われた（少なくとも奪われたと思われる）対象は、当人にとつて、まさしく自分の命よりも大切なもの、自分の生と存在の根拠・根底そのものとなつてしまつてゐる。かくして、最初は単なる憧憬であり、快樂の追及でしかなかつた恋愛が、やがては嫉妬の苦しみとなつて固定化する。だが、そうなるのはむしろ当然のことであつて、それというのも、この感情がもともと、私たちがみずからの根拠・根底を失つてしまつた苦悩から生まれたものだからである。それゆえに、恋愛には私たちの全生命、全実存がかかつてゐるのであり、だからこそ、恋愛は相手のすべて、相手の全生命、全実存を要求するのであるが、もちろん、それは「この世を支配する法則ゆえに、とうてい満たすことも不可能であれば、癒すことも困難となつた不合理的な欲求」にほかならない。

「というのも、恋愛は、最初は欲望から生まれるけれども、のちになると、苦しい不安によってしか継続しない。アルベルチヌの生の一部が私から逃れ去るのを感じるのであった。恋愛は、幸福な欲望のなかにあっても、苦しい不安のなかにあっても、同じように、ひとつの全体への強い欲求である。一部分がなお獲得すべきものとして残されていないかぎり、愛は生まれず、愛は存続しない。ひとが愛するのはまだ全的に所有されていないものだけである」。(III-614)

しかし、恋愛の経験がまったく不毛だというわけではない。

「私がかつてシャネルゼリゼで予感し、それ以来、ますますその通りだと思ったことは、ある女を愛するとき、私たちは単に彼女のなかに私たちの魂の状態を投影しているにすぎないということ、したがって、重要なのは女の価値ではなく、その魂の状態の深さであるということ、そしてひとりの少女が私たちに与える感動は、私たち自身の内部の奥深い部分を私たちの意識に上らせてくれる。しかも、優れたひとと話しているときに、いやそのひとを感嘆しつづながめているときに、私たちに与えられる喜びがそうしてくれるよりも、もっと内密で、もっと個人的で、もっと奥深く、もっと本質的な部分を私たちの意識に上らせてくれるということだった」。(II-189.90)

私たちが恋の対象である人間に投影する渴望とは、何の根拠もない不毛な感情ではけっしてなく、私たちの存在の根底からわきだす感情、私たちの本質的な部分、つまり私たちの真の自己に呼応する本質的感情なのである。

IV 社交界とスノビズム

フォーブール・サンジェルマンの社交界への「私」のあこがれが生まれるのは、「ゲルマント」という名への信仰からである。少年の「私」は、ゲルマントの方への散歩の折、「メロヴィンガ王朝時代の神秘に包まれ、ゲルマントのアントというシラブルから出てくるオレンジ色の光を浴びて、さながらその名のなかに浸っているように思われる」(188) 壮麗な世界を想像するのであった。要するに、社交界へのあこがれも、その発生のメカニズムは旅行の夢や恋愛の夢の場合と同じく、まだ見ぬ未知の世界にみずからの欲望を投影することによって生まれる。その後、ゲルマント家についての知識が増えていくにつれて、そのイメージはつきつぎに修正を余儀なくされ、ついに「私」の家族がパリのゲルマント

邸の一面に住むにおよんで、その神秘性はあえなく消え去ろうとする。

「しかし、ゲルマント家のサロンは私がかつてその名から引き出した特異性をもう見せてはくれないと知っても、それは私にとって決定的なものではなかった。そのサロンに入ることがかつて私に禁じられていたという事実そのものが、読んだ小説に描かれていたり、自分が見た夢に浮かんだりしたサロンと同じような形をそのサロンにとらせることを私に強いながら、そのサロンがほかのすべてのサロンと同じであるとはつきり分かっているときでさえ、まったく別物のように私に想像させるのであって、私とそのサロンとのあいだには柵があり、そこで現実が遮断されているのであった。ゲルマント家の晩餐会に出ることは、長年渴望された旅行をくわだてたり、私の頭のなかのひとつの欲望を目のまえにもたらしたり、夢と親しい関係を結んだりするようなものであった」。(II-670)

ところが、フォーブール・サン・ジェルマン第一等とされるゲルマント家のサロンは、思いもかけず「私」に開かれることになる。ある時、ゲルマント公爵夫人自身から晩餐会への招待を受けたのである。すると自分でも驚いたことに、まるで憑き物が落ちたように、そのサロンに無関心になっているのに「私」は気づく。そのなかに入ることが許されたというだけで、サロンへの想像力の源がすっかり涸れてしまったのだ。そしてじつさい、「私」が初めて経験したサロンは退屈そのものであり、晩餐会が終わりに近づいたころ、「私」はこう考えたほどである——「みなくだらないことしか話さなかった。それはおそらく、私がこの場にいるからだろう」(II-682)。

たしかに、このサロンに集っている貴族たちは何世紀もさかのほることができる名家が多く、歴史的好奇心からすれば、興味深いとは言えた。

「とはいっても、私の歴史的好奇心は、審美的喜びにくらべると、まだ弱いものだった。結局、引きあいに出された由緒正しい名が、公爵夫人の招待客たちを精神化する効果をもつことになったが、それでもなければ、アグリジャントないしシストリア大公と呼ばれてはいても、肉でできた、頭のよくなさそうな、頭がいいといっても大したことはなさそうな、そのご面相は、彼らをすつかりありきたりの人間に変えてしまっていたのであって、その意味では、要するに、最初私がこの家の玄関の靴ぬぐいを踏んだとき、かねがね思っていたような〈名〉の住む魔法の世界の入口に降り立ったのではなく、その果てに來ていたのであった」。(II-831)

以上のように、じつさいの社交界には「私」がかつて思い描いていたような高貴さとか精神性といったものは何ひとつ見当たらず、それらは

皆、「私」のあこがれのなか、想像のなかに存在するにすぎなかったのである。このように、社交界の価値とか社会的地位とは、あくまでそれを知らない人間、つまりサロンに入れない人間、サロンに入ることを禁じられている人間の頭のなか、想像のなかにしか、存在しないのだ。社交界の価値とか社会的地位というものは現実的裏付けを持たないのであり、それはもっぱら、そこに入れない人間の夢やあこがれや、そこに入ることを禁じられている人間、そこから締め出されている人間の嫉妬や怨念によって支えられているにすぎない。

上流社交界に属する人々、つまり由緒正しい名門貴族たちは、みずからの価値や社会的地位の客観性を信じている、少なくとも信じているふりをしているが、一方では、それが他者の幻想によつてもっぱら支えられていることを、なかば本能的に知っているのであつて、それゆえ、彼らの生活はこの幻想を維持するという唯一の目的にしたがつて巧妙に組織化・形式化されている。彼らは、あらゆる手段を用い、あらゆる機会を捉えて、人々の間にこの幻想をかきたてようとする。この技法はけつして表に立つことはなく、さまざまな美名や口実によつて隠されているが、彼らの言動のいたるところに、そうした目に見えない技巧が凝らされている。その技巧とは、一言でいえば、「相手との距離をマークしようとする技術、それも変幻極まりない技術」(II-736)である。それは、人々が自分たちに近づきになるのが非常に困難なこと、ほとんど不可能なことのように思わせる技術、また仮に近づきになれたとしても、それはまったく例外的なこと、このうえもない恩典であるかのように相手に思い込ませる、そんな技術である。たとえばゲルマント家の人々は、こちらが彼らに紹介される段になると、「一種の儀式の手順を踏む」のであつて、「その儀式たるや、あたかもこちらに手を差し出したという事実が、まるで騎士聖別式を執り行つたほど大したことであつたと思わせかねない」(II-736)のである。

上流貴族の生活で、サロンが重要な意味を持つのもまさにこの点においてであり、彼らがそこで味わう不毛な楽しみは二義的なものにすぎない。彼らにとつてサロンとは、何よりもまず、人々のあいだに幻想や欲望、さらには嫉妬心をかきたてるためのトリックの舞台であり、そこに人々の幻想と欲望は無限に拡大されて映し出されることになる。そのトリックの本質をなすのは「選択と排除」の論理である。彼らはひとが自分のサロンに入るための厳しい資格を設ける。その資格とは、表向きはさまざまな美名に飾られているとしても、実質的にはその人間の社交界での地位によつてすでに決まっている。ゲルマント家のサロンであれば、その表向きの資格とは、理知と魅力である。ところが、彼らは理知や魅力の基準そのものをゆがめしてしまうのであつて、「理知と魅力の必要係数は、ゲルマント公爵夫人のもとに招待されたいと願うひとのランクが高くなるにしたがつて下がっていき、おもだった王族になるとゼロにまで近づく」とすれば、逆に、この王族の水準から下がれば下がるほど、係数は上がっていく」(II-744)。それゆえ「男性は学者というふれこみであつても、辞書のように退屈であつたり、それどころか平凡なことといったらセールスマンの頭程度」なのであり、また「女性はいさかいであつても、おそろしく柄が悪かつたり、おしゃべり」であつたりで、結局

「地位のない人たちときたらひどいもので、みんなスノップにきまっている」(HT43)のであった。

自分たちのサロンに入れるべき人間の選別に彼らがこれほど厳しいのは、それ自体は無でしかないサロンの価値は、ひとえにこの選別によって決まるからである。サロンの唯一の関心事は、誰を呼んで誰を呼ばないかということである。「あんなひとを入れるのね、ここは！」——その一言でそのサロンは失墜する。この選別の基準が厳しければ厳しいほど、またこの基準を厳しくできればできるほど、そのサロンの地位は高いということになる。したがって、ゲルマント夫人のそのような上流サロンはおのずから高いランクの人々によって構成されることになるが、それはまた、かなり高いランクの人間でもそこに入れないことを意味する。むしろ重要なのは後者であり、それによってサロンの地位の高さが誇示される。つまり、この排除こそが、人々のサロンにたいする幻想と欲望を維持するうえでもっとも有効な手段なのだ。というのも、サロンに入れない人間、サロンに入ることが禁じられた者たちこそ、サロンにたいする幻想と欲望の真の担い手であって、まさしくサロンに入れない、入ることが禁じられている状況が、彼らの内心にサロンへの幻想を生み出し、サロンに入りたいたいという欲望をいやがうえにも高めるのである。逆に、「私」の場合のように、サロンに入ることがひとたび許されてしまえば、許されたというだけで、サロンにたいする幻想と欲望は消えてしまう。

以上のことから、ゲルマントの人々がなぜ頑としてブルジョワたちを自分のサロンに入れようとしなかが説明される。それは、彼らがブルジョワたちを無視しているからではけつてない。それどころか、彼らの生活自体がそうであるところの虚構の演技は、総じてブルジョワたちに向けられていると言ってもよい。彼らはサロンの柵越しにこぼれんばかりの媚びをブルジョワたちに振りまく。だが、その媚びにひかれてブルジョワたちがサロンに入ろうとすると、とたんにサロンの扉はかたく閉ざされる。ブルジョワたちは、扉の外側から、欲望と嫉妬の熱い視線をサロンに注ぐだろう。貴族たちが待ち構えているのは、まさにこの熱い視線である。しかもブルジョワたちがサロンに入ろうとすればするほど、貴族の術中にはまることになる。貴族たちはサロンの扉をさらにかたく閉ざし、ブルジョワたちの欲望と嫉妬をいつそうかきたてようとするばかりで、けつて彼らをサロンに入れようとはしないだろう。ひとたびサロンに入れてしまえば、彼らの欲望と嫉妬は消えてしまい、それと同時に、貴族の地位の〈実体〉も消えてしまうのを、貴族たちはよく知っているからである。このように、貴族サロンはブルジョワたちを踏みつけにすることによって、つまりはブルジョワたちの欲望と嫉妬を土台として、成り立っているのであって、「サロンの特質は」(…)「よけいなものを犠牲にすることをその根底とする」(HT44)。だがこうして犠牲にされた「よけいなもの」こそ、目には見えないが、サロンの礎なのであり、この礎がなくなれば、サロンそのものが崩壊する。

以上のように、貴族たちの地位を支えている（実体）とは、ブルジョワたちのスノビズムにほかならない。じつさい、作品には数多くのスノッブたちが登場するが、その典型はヴェルデュラン夫人とルグランタンであろう。

「スワンの恋」に描かれているヴェルデュラン家のサロンは、ゲルマントのサロンとはおよそかけ離れたブルジョワ小サロンにすぎないが、主人夫妻はその打ち解けた雰囲気をこよなく愛し、この「小さな核」、「小さなグルーブ」、「小さな党」にすっかり満足しきっているようにも見える。彼らはつねづね「この家に入りにくい連中の夜会は雨のようになりたいくつだ」とか「サガン大公夫人やゲルマント公爵夫人は、その晩餐会に多くのひとを集めるのに、さもしい連中をお金で駆り集めなくてはならないのですよ」と言っていたし、自分たちのサロンでは儀式ばったことを避けようとするのも「彼らがベスト菌のように警戒している（やりきれない連中）に似ないようにするため」であつた。もちろん、こうした態度は見せかけにすぎず、「やりきれない連中」への軽蔑の仮面の背後には、燃えるような憎悪が隠されている。ヴェルデュラン夫人は、自分のサロンが貴族サロンとはまったく違った特色や魅力を持つていることを強調し、それによって自分のサロンの優越性を周囲の人々に信じ込ませようとするが、人々に信じ込ませようとしているこの優越性を、誰よりも彼女自身が信じていない。彼女が信じている唯一の価値とは、貴族の絶対的優越性であり、それこそ彼女が真に執着しているものである。しかしそれを認めることは、今の自分が無であることを認めることであり、それは彼女の自尊心が許さない。というよりも、この事実を自分に認めざるをえないことによって、彼女の自尊心はすでに癒しがたく傷つけられているのであり、この傷ついた自尊心を暴かれることを彼女は何よりも恐れている。彼女にとって、この傷ついた自尊心に触れられること以上に大きな苦痛はない。夫人のサロンの席でたまたまスワンがフォーブール・サン＝ジェルマンの常連であることが話題に出てしまったときの彼女の反応は、この傷ついた自尊心がいかなるものであるかをよく示している。

「ヴェルデュラン氏は、そんな（やりきれない連中）の名前が、よりによって、すべての信者たちの面前で放言されたとなると、それが妻にさぞやひどい苦痛の印象を生んだにちがひなかったと心配して、不安な心遣いに満ちたまなざしを彼女のうえにこつそり投げかけた。そのとき彼が見たのは、ヴェルデュラン夫人が（……）そういうことがじつさいにあつたとは断じて認めまい、たつたいま自分に告げられた知らせには心を動かされまい、単に黙っているだけではなく、耳をふさぐ」とする、そんな決意のうちに、自分の沈黙が同意を表わしているのではなくて、無機物の無感覚の沈黙であると見せかけるため、急に自分の顔からいっさいの生氣、いっさいの動きをはぎ取ってしまった姿であつた」。（I-254）

この傷つけられた自尊心、そして貴族への嫉妬と憎悪、それはもともと貴族の優越性を信じることから生まれたものである。しかし嫉妬や憎悪に駆り立てられた彼女の想像力は、彼女の精神のうちに、貴族の優越性をさらに拡大して映し出すだろう。それによって彼女の自尊心はますます癒しがたく傷つけられ、かくして彼女は、ちょうど「私」がアルベルチーヌにたいして陥ったような、嫉妬の無間地獄にはまり込む。いまや彼女にとって、貴族サロンは、遠くから仰ぎ見る理想といったものではなく、是が非でもこれを征服しなければすまない復讐の対象となる。貴族サロンを征服し、復讐をとげるまでは、彼女の自尊心は癒されることはなく、それゆえこの無間地獄から抜け出ることもできないだろう。

ルグランダンのスノビズムの心理も、ヴェルデュラン夫人のそれとほぼ同じである。彼は、自然を愛し、自由気ままに生きる芸術愛好家として、社交界などにはまったく興味が無いといったふうを装っていたが、それにしては、貴族社会、社交生活、スノビズムにたいする彼の憎悪は異常なほどであった。彼はそれらにたいして「火のような毒舌を吐き」、「スノビズムは、聖パウロが赦免されない罪について語るとき、たしかにその念頭に浮かべられている罪だ」(167)と言うのだ。

「社交的な野心は、祖母には感得することも、ほとんど理解することも不可能な感情なので、そんな野心をけなすためにそれほど熱意を燃やすのはひどく無益なことのように思われた。それにまた、ルグランダンの妹がバルベックの近くで、バス＝ノルマンディ地方のある貴族と結婚していたのに、貴族たちをことごとく断頭台上がらせなかったことで大革命を非難するほど激しい貴族攻撃に熱中するのは、祖母にはあまりいい趣味とは思われなかった」(168)

もちろん、貴族にたいするこれほどの憎悪は、貴族への熱烈なあこがれ、社交界への強い執着の裏返し表現にほかならない。要するに、彼はスノップなのだ。

「(…)私が(ゲルマント家の方々をごぞんじですか)とたずねると、話好きのルグランドンは答えた。へいいえ、知ろうと思ったこともありません。あいにくそれは、第二のルグランドンが答えているにすぎなかった。というのは、彼が注意して内心に隠していたルグランドン、表に現わさないもうひとりのルグランドンが(…)まなざしの傷や、口もとの皺や、極度に真剣な返答の調子や、無数の矢、私たちの話好きのルグランドンをまるでスノビズムに殉じた聖セバ스티アヌスのように一瞬のあいだに突きさし、ぐったりさせた無数の矢によって、すでにこう答えてしまっていたからであった。(ああー あなたはどうして私をそんなに痛めつけるのです！ 知らないといったら私は知

らないのです！ ゲルマンのひとたちを。私の生涯の大きな苦痛を呼びさまさないでください。」(I-127)

スノビズムとは、以上のように、今の自分に満足できず、今とは別の人間になりたいという願望であると、一応は言うことができるだろう。あるいは、今の自分はほんとうの自分ではなく、ほんとうの自分は今とはまったく別の人間であるべきであり、またあるはずだという思いだと言つてもよい。だがそれにしても、私たちはどうしてそんな願望、そんな思いを抱くのだろうか。そのうえ、私たちはそのような願望、そのような思いを抱くことを誰からも強いられてはいない。むしろ、そんな願望、そんな思いを抱いていることを、本人自身が恥ずかしいこと、隠すべきことと思つていたのであつて、それはあくまで、他者には秘すべき内的感情にほかならない。とはいへ、この内的感情は、自分にも抑えることのできない凶暴な力をもつことさえある。じつさい、ヴェルデュラン夫人やルグランタンにとつて、スノビズムこそ、生涯をかけた情熱であつた。

結局、スノビズムもまた、恋愛と同じく、あくまで内発的な感情であり、しかもそれが亢進すれば、自分の全生命、全実存をかけた激しい情熱になりうる感情なのである。というのも、この感情の背後には、自分の全生命、全実存にかかわるような根源的な渴望が潜んでいるからである。すでに見たように、その根源的な渴望とは、私たちの自己がみずからの根拠・根底から引き離れている、みずからの根拠・根底を失つていくという欠如・欠落を原因として生まれたものにほかならず、それはまさしく、今の自分はほんとうの自分ではない、今の自分はほんとうの自分、真の自己から引き離されているという苦悩であり、それゆえにまた、なんとしてもほんとうの自分、真の自己になりたい、戻りたいという願望なのである。ヴェルデュラン夫人やルグランタンのスノビズムとは、私たちのうちにもともと潜んでいるこの苦悩と願望を貴族階級や上流社交界に投影したものにほかならない。だからこそ、彼らは、自分はほんらい貴族階級や上流社交界に属すべき人間なのに自分はそこから排除されている、自分がほんらい占めるべき地位を奪われている、という激しい嫉妬の苦しみに苛まれ続けているのであつて、彼らの貴族階級や上流社交界への異常とも言える憎悪や復讐心の原因もそこにある。とはいへ、貴族階級や上流社交界に属することができれば、自分がほんとうの自分、真の自己になれる、つまりは真の自己実現が可能になる、というのはあくまで幻想にすぎない。

おわりに

最初に述べたように、本稿の目的は、無意志的記憶および芸術の主題と恋愛および社交界・スノビズムの主題の関係を探ること、言い換え

ば、両者を貫く根本主題を見出すことであり、それによって、ブルーストの小説の真の統一性が明らかにすることである。

両者を貫く根本主題とは何か。それは、この小説のタイトル、すなわち「失われた時を求めて」という言葉に暗示されているだろう。「失われた時を求める」という意味は、単に過ぎ去った過去のことを思い出す、失った過去を取り戻す、ということではない。ここで言う「時」とは、まさに世界の始まりを意味する。私たちは、すなわち私たちが通常そうであるところの自己は、世界の始まりとしての「時」をあらかじめ失っているのだが、主人公「私」は、半生にわたって、さまざまに迷いながら、その失われた「時」を求め続け、それをついに見出す、というのがこの小説の根本主題にはかならない。しかし、世界の始まりであるこの「時」は、同時にまた、私たちの自己の始原でもある。したがって、私たちが「時」を失っているということは、私たち自身の真の自己を失っているということであり、それゆえ、その失われた「時」を求めるということは、そのまま、私たちの真の自己を求めるということでもあるのだ。

しかし、私たちが通常そうであるところの自己は、失われた「時」を見出すことが原理的にできない。というのも、すでに見たように、この自己はまさしく世界の始まりとしての「時」を否定したところに成立しているのである。すなわち、私たちの真の主体であるこの「時」から離脱し、みずから独立した主体となったのが、私たちが通常そうであるところの自己なのである。もちろん、この自己は真の主体ではないのであって、みずからのうちに深い欠如・欠落をかかえこんだ存在であり、そこから根源的な渴望が生まれる。ところが、この根源的な渴望は、その真の対象そのもの、すなわち世界の始まりとしての「時」を否定することによって生まれたものである以上、真の対象であるこの「時」に差し向けられることはありえない。そもそも、主体となったこの自己にとって、自分以外のすべてのものは自分の外部に客体として存在する。そこでこの自己は、自分が抱えこんだ根源的な渴望を外部世界の何らかの対象に投影し、その対象を追い求め、その対象に到達し、その対象を所有することによって、その渴望を満たそうとする。旅行の夢、恋愛の夢、社交界の夢、すべてはそのようにして生まれるが、そうした夢も、ほんとうは失われた「時」、失われた真の自己への渴望にはかならないのである。

「今までの実人生で嘗てきたさまざまな失望から、私は人生の真の現実とは行動以外のどこかにあるという思いを抱かざるをえなかったが、こうした失望を省みるに、そのさまざまな失望を、単なる偶然の成り行きや、その時々々の生活の状況のせいにして、片付けてしまいうけにはいかなかった。旅行の夢も、恋の失望も、異なった失望ではなく、同じひとつの失望、すなわち物質的享受や実際の行動においては真に自己実現する〔se réaliser〕ことができないという失望が、その都度呈する異なった相にはかならないことを、私は強く感じていた」。

このように、「私」を長い間にわたって苛み、さまざまな対象に向かって駆り立てた渴望とは、私たち自身が、世界の始まりとしての「時」を失い、それによって真の生、真の自己を失ったために、私たち自身のうちに生まれた渴望にほかならず、それゆえ、この渴望は、私たち自身のうちにおいて、失われた「時」を見出し、私たち自身が真の自己となることによってしか、満たされることはありえないのである。

「私自身の奥底にひそんでいるものに、現実のなかではけっしてたどり着けないことを、私はいやというほど経験してきた。私はもう分かっていた——バルベックへの二度目の旅においても、タンソンヴィルに行つてジルベルトに会うことによつても、失われた時を見出すことはできなかったように、サン＝マルコ広場に行つたところで、それを見出すことはありえないことを。つまり、それらの印象が私自身のそと、たとえばある広場の片隅に存在しているという錯覚をまたしても抱かせるだけの旅行は、私が求めている方法ではありえないのだ。〔…〕そうした印象をより深く味わう唯一の方法は、それらが存在する場所、すなわち私自身のなかで、もっとそれらを知る努力をすること、それらをその深い底の底まで明らかにするよう努めることであつた」。(IV-425.6)

言うまでもなく、失われた「時」を、そして失われた真の自己を、自分の内部において、ふたたび見出すのは無意志的記憶あるいは謎めいた印象を通じてであり、そうして見出した「時」と真の自己を表現し実現するのが芸術創造の役割である。

このように、無意志的記憶および芸術の主題と恋愛および社交界・スノビズムの主題は、双方ともに、失われた「時」を求め、失われた真の自己を求めるという、この小説の根本主題に収斂するのであつて、両者は平行関係にあると同時に緊張関係にある。つまりそれは、失われた「時」、失われた真の自己を、外部に求めるのか、内部に求めるのか、というふたつの方向性のせめぎ合いなのである。

「われわれはみずから選んでふたつの力のどちらかに身をまかせることができる。一方の力はわれわれ自身からわきおこり、われわれの深い印象から生まれる。他方の力は外部からわれわれにやってくる。前者はおのずから喜びを伴う。それは創造者たちの生活から生まれる喜びである。後者の力、それは外部のひとたちの陥っている動揺からわれわれのうちに伝わってくる振動で、それは喜びを伴わないのである」。(II-836)

たとえば、ヴァントゥイユの「七重奏」を聴きながら、「私」は「この作品の冒頭、あけぼのの最初の叫びのなかには、アルベルチヌへの

恋よりもっと神秘的な何かが約束されていたようだ」(8-443)とつぶやく。つまり芸術と恋との対比。

「ヴァントウイユの作品からは」私が終生聴くことをやめないだろうあのふしぎな呼びかけが私にまで届けられたのであった。その呼びかけは、私があらゆる快樂のなかに見出し、恋のなかにさえ見出したあの虚無とは別のものが存在するという約束「…」のようなものであった」。(III-767)

さらに芸術と社交界との対比。

「社交界は虚無の王国である。〔…〕差異の世界などというものはこの地球上のどんな国にも存在せず、われわれの知覚はあらゆる国々を均一化してしまう。ましてや〈社交界〉と称するせまいところに差異の世界が存在するはずはない。それでも、そんな世界はどこかに存在するのであるか？ ヴァントウイユの七重奏曲はそれが存在すると私に告げているように思われたのであった。しかしどこに？」(III-780. 1)

このように、「私」が恋愛において、また社交界において、見出したのは、結局のところ、虚無でしかなかった。それはほかでもなく、恋愛や社交界に、つまりは外部の世界に、みずからの根源的な渴望を満たしてくれる対象を追い求める私たちの自己、主体としての自己そのものの非現実性、虚無性ゆえである。私たちが通常そうであるところの自己、主体としての自己であるかぎり、私たちは、差異の世界、つまりは私たちの真の現実、真の生を生きることができないのだ。しかしそのことを知るためにも、私たちは徹底した挫折と幻滅を経なければならぬ。それによつてはじめて、私たちが通常そうであるところの自己、主体としての自己は打ち碎かれ、まさに「全人格の転倒」(III-795)が起きるのであろう。かくして私たちは、主体としての自己から受容者としての自己へと立ち戻る。この受容者としての自己こそ、真の現実を知り、真の生を生きることができる自己、つまりは私たちの真の自己なのである。